







































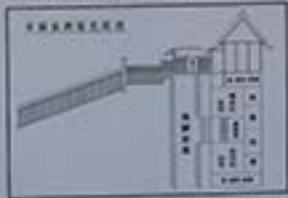






猪谷関跡(富山藩西猪谷関所跡)

神通川には、城守と関所を結ぶ道は早くから交通路がひろげ、多くの旅人や荷物が行き交っていました。こうした動きを監視するために、幕府が置かれ、江戸時代になると、神通川上流の西猪谷関所と東猪谷関所、室牧川上流の切坊関所などが富山藩および加賀藩の関所として重要な役割を担っていました。



西猪谷関所は、元禄二(一六八五)から、明和四年(一七六六)までの約八〇年間置かれ、特に富山藩が立派にした寛永一八年(一六四一)からは勘元の本陣と西村家が代々の番人を務め、人や物の監視などの重要な役割にあたりました。番人は関所内の建物で生活し、その建物には川舟方八十両間、山舟方八三十八間の突当りがあり、番所には常時番頭二番頭が備えられました。番頭の大黒屋敷(特に安永三年、一七七三)の騒動、幕末のロシア船来航(文化二年、一八〇五)、水戸で起こった天竺文の乱(元治元年、一八六〇)など、物騒騒とした時には、船隻の荷役交代で監視を怠っていません。関所の通行については、出入りの時時刻として関所手形が必要でしたが、近隣の村には小さな検印札が交付され、生活の便宜が図られていました。一方、物の移動については監視が厳しく、中でも米や塩、魚類の重要な品物は送り切手が必要でした。また、関所を夜舎として徴収する口税額は、塩の場合一斗につきわずか一分五厘程度であった事から、収益率は関所を維持する程度のもので推測されます。これらの記録は「機本家文書」と呼ばれる古文書に残されています。

平成二十年 三月
富山県教育委員会
富山市教育委員会





































